

特別寄稿

スウィフトとアイルランド
——Anglo-Irish or Irish?——

塩谷 清人

スウィフトといえば、夏目漱石の『文学評論』の「スウィフトと厭世文学」を思い出す。本邦初のスウィフト紹介ということもあって、その中で漱石はかなり力のこもったスウィフト論を展開している。しかし、この評論はいくつかの誤解を後世の読者に与えている。まず、資料としてウォルター・スコットの不完全な伝記にかなり依存しているから、事実誤認も目立つ⁽¹⁾。「厭世」のスウィフトのイメージも強烈過ぎる。それはともかく、漱石のスウィフト論を一言でいえば、スウィフトの文学は風刺文学であるとする。それは、「不満足を表す文学的表現」であり、スウィフトは「過去、現在、未来を通じて、古今東西を尽くして、いやしくも人間たる以上は、ことごとく嫌悪すべき動物であるという不満足」の男であるが、十八世紀は決してそんな気持ちを生じさせる時代ではないから「スウィフトに至っては、如何にしても十八世紀流でない」、「一種の常軌を外れた現象」である。その原因は「彼一人に独特な一身上の経験に求めるより外に道が無い」、「彼の私生涯がどの位不愉快であったか、また彼の公生涯がどの位失敗に終わったかを見るより外に仕方がない」と書いている。また、「スウィフトの作は不愉快である」という一文が繰り返される。つまりスウィフト個人の精神的不満、かつ肉体的苦痛から彼の文学は生まれているとする。

『ガリヴァー旅行記』の第四部馬の国の話で人間嫌いのことが書いてあり、厭世家と言われれば、否定はできない。メニエール病の持病があり（漱石はこれが一番の理由だろうと推測している）、それが原因で目まい、耳鳴り、難聴、頭痛が激しく、そういう気分になることはしばしばあった。またこの厄介な肉体(body)から逃げられないし、精神活動(mind)もそれと切り離せないという思いが終生あった。スカトロロジーの問題もそれと関連がある。もちろん人生にいろいろ不満があったことはスウィフトの伝記から見えてくる。

しかし、漱石のいうように、スウィフトの人生は灰色一色だったわけではない。スウィフトは話し好きで来客が多く、またお酒（主にワイン）をよく飲んだというように、社交的な人間であった。人間関係も豊かで、多くの女性から愛された。初期のスウィフト伝記作家で、晩年の彼と親しかったオーラリ伯(Earl of Orrery)は、スウィフト家にたくさん女性が集まったことを「後宮」(seraglio)のようだったと記している⁽²⁾。また水泳や乗馬が好きで、自然を愛し、ガーデニング、庭園造りも好きだった。ロンドンに長期滞在したとき、「アイルランドのわが庭を散策したい、柳に会いたい」⁽³⁾と書いている。

この小論では、漱石の思考に入っていない側面、スウィフトとアイルランドの関係に焦点を絞って、彼の公的な面、政治的、宗教的側面を示しながら説明する。漱石は20世紀初頭という時代的制約もあり、また文学的情報を彼に与えたレズリー・スティーヴン(Leslie Stephen)や彼の師であったウィリアム・クレイグ(William Craig)など、イギリス文学中心の学者の影響のもとに文学論を展開している。したがって、スウィフトをイギリス文学の作家としてとらえているが、現在のスウィフト研究では、アイルランドに在住するアングロアイリッシュ⁽⁴⁾、さらにいえば、アイルランド文学の視点こそ重要であるという見方が一般的である⁽⁵⁾。スウィフトなど、当時のアングロアイリッシュにとって一番大きな問題は、アイルランドにしながら昔からいるアイルランド人と自己同一できないことである。

スウィフトは晩年になっても「私はこのひどい国の者ではない、私はイングランド人だ」(“I am not of this vile country, I am an Englishman.”)(Orrery)⁽⁶⁾と親しい人についていた。しかし、我々はアイルランドの愛国者という扱いを受けたスウィフトも知っている。なぜ、親しいものには自分はイングランド人と言い続けていたスウィフトがアイルランドの問題から目を背けることができなくなり、その引力に引かれて行ったのか。どのような経緯でアイルランドのために献身するようになったのか、つまり、アングロアイリッシュでありながら、かつアイルランド人として認識していくのかを、探ってみることにする。そもそも、アイルランド人とは何者か？

アイルランド人とは何者か？

もともと紀元前5、6世紀からケルト人が住んでいたから、彼らをアイルランド原住民ということができる。1169年ヘンリー二世率いるアングロノルマン人⁽⁷⁾の到来以来、イギリスから侵略が続き、移住者が入ってきている。スウィフトの認識ではこのアングロノルマン人やイギリスから移住してきた人々は侵略者である。アイルランド史では、1542年ヘンリー八世が正式にアイルランドの国王とされる以前の移住者を「オールド・イングリッシュ」(Old English)と呼び、それ以降の移住者を「ニュー・イングリッシュ」(New English)と呼んで区別している。その理由は、オールド・イングリッシュがケルト系原住民とかなり同化していて、信仰面でもカトリック教徒であったから、イングランド国教徒のニュー・イングリッシュとはっきり区別できるからである。イングランド政府からの迫害を受けるのは、彼らオールド・イングリッシュの人々であ

る。

政治的には、アングロノルマンの侵略以来イギリスの圧政支配は続いているが、15世紀末のヘンリー七世時代、1494年ポイニングズ法(Poynings' Law)により、それが一層明確になる。これにより、アイルランド議会の開催は国王の許可のに基づき、しかもすべての法案はあらかじめ国王とイギリス議会の承認を受けておくということが決まり（これは1782年まで続く）、アイルランド議会は独自の政策を行うことができなくて、大きな制約を受けた。さらにヘンリー八世の宗教改革以降、カトリック教徒は自らの土地をイギリス人に奪われ続けた。つまり、政治、行政、宗教などあらゆる面で、オールド・イングリッシュは圧迫を受けた。ケルト系住民はもとより彼らオールド・イングリッシュこそアイルランド人と考えられる。彼らは、抑圧者であるアングロアイリッシュ（ニュー・イングリッシュ）とははっきり区別される。スウィフトの時代もこの基本構造は変わっていなかった。つまり、スウィフトがどの程度彼らオールド・イングリッシュと共通の認識を持つようになるかがポイントになる。

スウィフトの先祖はイングランドのヨークシャー出身で、祖父(Thomas Swift) (1595-1658)は資産ある司祭であったが、ピューリタン革命のとき、チャールズ一世に忠誠を尽くし[ロイヤリストという]、その支援で資産をなくした。そのため、6人の息子のうち4人が王政復古以後にアイルランドに移住した。アイルランドでは、1662年の「土地処分法」(the Act of Settlement)で土地が没収され、もともとのカトリック（オールド・イングリッシュ）の土地所有者に三分の一、昔からいるプロテスタント（ニュー・イングリッシュ）に三分の一、さらにイングランドからの新参者に三分の一が与えられることになった。その利得を求めてスウィフトの親を含めた兄弟[ゴッドウィン、ウィリアム、アダム、ジョナサン（スウィフトの父）]が来たわけである。つまりニュー・イングリッシュの新参者である。

スウィフトは1667年11月30日にダブリンで生まれているが、その前の3月か4月に父が死亡したため、母は財政的援助を父の兄弟、スウィフトの伯父たちに頼った。スウィフトの不幸の始まりといえるかもしれない。1689年にダブリンのトリニティカレッジを卒業している。いずれにしても、生地として、22歳まで過ごした土地としてアイルランドへの愛着はあっただろう。

転機は1689年の名誉革命動乱で訪れる。その混乱を避けて、スウィフト家の知り合いであるイングランドのサー・ウィリアム・テンブル(Sir William Temple)のムアハウス

に身を寄せる。テンプルは外交官、政治家であったが、このころは引退していた。彼の秘書としてスウィフトは、テンプルの著作の整理をした。テンプルはウィリアム三世とも昵懇の仲であったから、スウィフトはこの国王に接見してもいる。若いスウィフトは野心があったから、テンプルの世話でイングランドでのいい就職口（公職）を期待していたし、テンプルからもそれを匂わせる話があったが、一向に実現しなかった。仕方なくスウィフトは 1694 年アイルランドに戻り、翌年北のアルスター地方のキルルート (Kilroot) [Templecorran, Ballynure の教会も合わせて] の司祭になる。

当時、アイルランドの全人口は 300 万人くらい（推定）で、7 割以上がカトリック教徒だった。残りの 20% 強がプロテスタント系で、その中で、多数派はスコットランド系プレスビテリアン（長老派）である。アルスター地方のカリックファーガス (Carrickfergus) 周辺は特にそうであった。イングランド国教会（アイルランドではアイルランド国教会という）では、場合によって「10 人以下、いや 6 人以下しか教会に来なかった」(Louis Landa) ⁽⁸⁾。教会自体も荒廃していた。若い司祭スウィフトは孤立していただろうと推測される。プレスビテリアン嫌いもこのころから強まったとされる。また地方の貧困状態を身近に見たと思われる。再度、テンプルの要請もあり、翌年 (1696 年) 逃げるようにイングランドのムアパークへ戻っている。1699 年テンプルが死亡したため、パークレー伯の礼拝堂付き司祭としてアイルランドへ戻り、翌年ララコー (Laracor) の司祭、さらにセントパトリック寺院の聖堂参事会員となる。ここからスウィフトのアイルランド教会での活動が本格的に始まる。アイルランドへの肩入れ、支持を示すようになる。それを示す最初の小論が次に紹介する作品である。

***The Story of the Injured Lady*（「ひどい目にあった婦人の話」）**

1707 年早々に書かれたと推定されるこの作品（スウィフト自身出来栄がよくないということで出版せず。1746 年死後出版）はわずか 10 ページ足らずの小論である。当時、イングランドとスコットランドの歴史的な合同（ユニオン）がまもなく成立するという状況にあった。1603 年の同君連合⁽⁹⁾以来、スコットランドは独立した国ではなかったが、アイルランドのように支配、隷属の関係ではなく、巧妙に独自性を発揮していた。経済的なことが契機になって合同に踏み切ったが、合同の協約はスコットランドの言い分も認めていた。この合同との比較から、スウィフトはイングランドとアイルランドの関係を問題視した。

話は、女（アイルランド）が身の上相談の手紙を友人に書くという形式で、これまで付き合っていた男（イングランド）が彼女を捨て別のあばずれ女（スコットランド）と結婚（合同）したことを嘆いている。アイルランドとスコットランドを女性として表象すること自体は、当時一般的であった。スウィフトはそれを男女関係の話にし、さらに弱い立場の女性というイメージを利用して、さんざん弄ばれた挙句見捨てられた女としてアイルランドを巧妙に描く。

私は近隣の誰よりも美人であったが、悲しみとひどい扱いから顔色も悪くなり、やせ細っている。自分ではいまでもきれいだと思うし、容貌も悪くないと思う。人々はいまの私を見て、昔とても美しかったなどほとんど思ってくれない。(p. 4)

女は被害者であるが、自分が初心で無知だったため男の誘惑に乗ってしまったという言い訳からは、女（アイルランド）の側にも非があることが見えてくる。アングロアイリッシュの立場から、スウィフトはイングランドを一方的に責めることはしない。この点は、スウィフトのアイデンティティの二国籍性とつながる大きな問題であるが、ここではとりあえず指摘するにとどめる。

女は自身の非を見つめつつ、自分をこのような零落の身に陥れた男（イングランド）への非難をエスカレートさせていく。

当時私は世間知らずでした。ですから彼に追従して、彼のやり方、生活様式に同調する約束をし、彼の執事がわが家を取り仕切り、さらに彼からの指示を受け取る執事補を勝手に置くことまで認めてしまいました。恋人はさらに昔からいる何人かの年取った召使いや小作人を追い出し、自分の家からほかの者を充てました。(p. 5)

イングランド政府の支配が徐々に完了して、生活様式もイングランド風になり、さらに同じ国王（執事）の支配のもとで派遣されたアイルランド総督（執事補）の管理下に置かれ、カトリック教徒（オールド・イングリッシュ）が土地を没収され、ニュー・イングリッシュが入植している状況がこのように描かれる。さらに追い打ちをかけて、

私を養うには、私の価値の十倍も金がかかる、私など呪われた方がずっとましだ・・・この教区の泥棒や強盗の監視の費用を私が払え、監督者、警官などに給与を与えろ、この人たちは全部彼が選んだ者で、ときどき私を監視するスパイでも

あるのですが・・・私たちは汚い連中で、私たちが手にしたものは触るのも耐えられないから・・・原材料はそのまま送れ、牛乳は牛からとってきたもので、チーズやバターに加工するな、穀類は穂に入ったままにしる、羊毛は羊から刈ったままでいい・・・(p. 6)

つまり、アイルランド再建のために投資し、その支配に役人や警官などお金がかかるから、アイルランドの税金を充てろ、アイルランドの生産物や原料を加工しないでイングランドに送って、費用の返済をしろという。これは一方的な輸出規制を指している。スウィフトはここでもかなり客観的にイングランド政府支配の問題点を指摘している。最大の問題とされる不在地主(absentees)もやり玉に挙がっている。この一節は、その引喻を読み変えれば、この 13 年後の 1720 年の「万人のアイルランド製品使用を提案する」(*A Proposal for the Universal Use of Irish Manufacture*)と基本的には変わっていない。

このようにアイルランドの抱える諸問題を、のちの「ドレイピア書簡」(*The Drapier's Letters*)のドレイピアと同じくスウィフト独特の説得力あるペルソナの使用によって、アイルランドの窮状を描く。少なくとも政治レベルでは、アイルランドの自治権を認めるべきだというのがスウィフトの主張である。一世紀半後(1870 年頃)から主張されるアイルランド自治(*Home Rule*)と同じ要求である。植民地のように、主従の関係を取るべきではない、現状の一方的な圧政は間違っている、改善すべきというスタンスを彼は取った。

この身の上相談には、それに対する回答「ひどい目にあった婦人への回答」(*The Answer to the Injured Lady*)がつけられている。その回答をアイルランド問題として読み直すと、アイルランドの人々が一致団結してアイルランド議会(当時機能停止状態にされていた)で、同じ国王を戴く以外は、自分たちのやり方で国を運営し、イングランドに従属せず、不在地主を根絶することなどを決議するように忠告している。

スウィフトは自身の墓碑銘に「激しい憤り」(*saeva indignatio*)と彫らせ、自らの死を悼む「スウィフト博士の死に接して歌う」(*Verses on the Death of Dr Swift*) (1731)で「公平なる自由こそ彼の叫びのすべて」('Fair LIBERTY was all his cry')と書いた男だったから、不公平や不当な弾圧には激しい憤りを感じた。それが、この小品にもよく出ている。

アイルランドの窮状はケルト系やカトリックの人々(オールド・イングリッシュ)

が一番感じていることだから、この点で、スウィフトの怒りは彼らアイルランド人の怒りでもある。一方、自治権は支配者（ニュー・イングリッシュ）の主張である。

アイルランド教会の一員として

スウィフトがアイルランドへの傾斜を強めた時期はララカーの教会の司祭となり、またセントパトリック寺院の聖堂参事会員として活発に動いたときと重なる。アイルランド教会はイングランド教会のアイルランド出先教会で、教義は同じアングリカンである。彼ら聖職者の任命権もイギリス国王が握っていた。アイルランドのプロテスタント系信者は 20 数パーセントで、その中でもアイルランド教会に属する者は少数派に過ぎなかったが、彼らが政治的にアイルランドを支配していた。スウィフトは聖職者としては終生このアングリカニズムを変えていない。宗教人としてはトーリー（保守）と自認するゆえんである。

しかし、ここでもアイルランド教会は不平等な状況にあった。当時、「初穂料⁽¹¹⁾と 20 分の 1 税」(the First Fruits and Twentieth Parts)免除がアイルランド教会で問題になっていた。すでに 1704 年、女王はそれらをイングランド教会に対して免除していた。当然ながら、同じことをアイルランド教会も要求すべしということになった。そうでなくとも貧しいアイルランドの司祭たちが初穂料を相変わらず課せられているのは誰の目にもおかしいことだった。ところが、アイルランド教会の訴えにもかかわらず、イングランド政府とアン女王は免除を裁可しようとはしなかった。

スウィフトは 1707 年聖職者会議の代議員(proctor)に選ばれ、アイルランド教会の有力なメンバーとなり、その 12 月に「初穂料」請願の正式な代表としてロンドンに派遣された。このとき政権を握っていたホイッグ党のシドニー・ゴドルフィン(Sydney Godolphin)など要人と会ったりして、一年半ほどいた⁽¹²⁾が、話は進まなかった。ホイッグ党が初穂料免除と抱き合わせに、非国教徒の公職活動を許す「審査法」⁽¹³⁾撤廃を求めたからである。スウィフトはキルルート時代の体験もあってプレスビテリアンなど非国教徒をひどく嫌っていたから、このホイッグ案はとても受け入れがたかった。そのことは、「ひどい目にあった婦人の話」の翌年 1708 年末に出版された「聖餐式審査[審査法]に関する一書簡」(*A Letter concerning the Sacramental Test*)に見ることができる。スウィフトはここで審査法撤廃に断固反対している。当時ホイッグ党の要人と接触していたから、この書簡は注目に値する。つまり、宗教人スウィフトは頑固なほど、ト

ーリー的な姿勢を維持していた。

そして再度 1710 年 9 月にイギリスへ行く。ほどなく政権がトーリー党に移り、大物議員ロバート・ハーリーと会う。彼は文学的な趣味もあり、スウィフトとすぐに意気投合した。スウィフトの政治的変節と言われる出来事である。ハーリーはジャーナリズムを政治に活用した初めての政治家といわれる。1711 年 5 月ハーリーが内閣を率い、彼のお蔭で 7 月、「初穂料」の難問もやっと解決の運びとなった。その後もスウィフトはロンドンに滞在し、当時スペイン継承戦争終結について世論が割れていたとき、政権側として終結へ世論を導く大きな役割を筆で果たした。2 年後によりやくウトレヒト条約(1713)が結ばれ、スペイン継承戦争も終わる。

先に触れたように、スウィフトのイングランドへの執着は晩年まで続いているが、このころもイングランドの聖職者に就きたいという思いを示していて、首相格のハーリー（オックスフォード伯）たちがイングランドの高位聖職の職を紹介してくれるものと期待していた。しかし、ハーリーたちはスウィフトを必要としていたから、就職の世話をしなかった。「3 つの首席司祭の職が空いたけれども一つも自分に回されない」（『ステラへの手紙』（1713.4.7）。誰もがイングランドこそスウィフトの適した場所のようと言うが、実際にそうなるよう努力してくれる者はいなかった。

このイングランド滞在中に書いた作品は、基本的にイングランド人、あるいはイギリス人の立場からのものである。たとえば、コミックサタイアの傑作とされる「キリスト教の廃止に反対する」*An Argument Against Abolishing Christianity* (1711)は、表面的にはキリスト教をふざけた調子で擁護し、廃止すれば、教義対立、分派などなくなる、日曜も制約なく自由勝手にできるとする廃止論に、どんな世でも派閥、対立はあるとし、日曜に規制があるから平日の欲望が高まるといった調子である。その本音は、信仰心が希薄で形式的になっているが、いま国民の大多数（イングランドでは）は形式的にでもキリスト教、つまりイングランド教会、アングリカニズムを支持している。その現状を変えることは必要ないとする。アイルランド側に立てば、アングリカンは少数派でしかなかったから、このような書き方にはならないだろう。

追放の身からアイルランドの愛国者へ

ウトレヒト条約の難題が片付いてやっと、スウィフトはダブリンのセントパトリック寺院の首席司祭に任命される。アイルランド教会の司祭もすべてロンドンで決まっ

ていた時代である。スウィフトはイングランド教会の聖職者になりたいと本心では思っていたから、次善の策、セカンドベストということになる。

アン女王が 1714 年 8 月初めに逝去し、ハノーヴァー家のジョージ一世が国王になると、政権はホイッグ党に移り、ハーリー（オックスフォード）、ボリングブルックは追われ、同様にスウィフトも居所がなくなり、アイルランドに帰国する。スウィフトとアイルランドとの関係はここから終生続くことになる。以後はアイルランドから逃れられなくなる。冒頭で述べた『ガリヴァー旅行記』第四部に出てくるヤフーは獣のような人間だが、ヤフーはアイルランド人のことだという解釈がしばしばなされる。その解釈で行けば、フイニム（馬）はイングランド人ということになる。さらに **Carole Fabricant** は「スウィフト自身もイングランド人（フイニム）になろうとして追放されたヤフー」⁽¹⁴⁾と読めるといっている。

その後 1714 年から 1720 年まで 6 年間公的なことに関与せず、しばらく静かな時期が続いた。たぶんイギリスがホイッグ党政権になり、当然アイルランドでもホイッグ支配になっていたから、現体制への不満、批判の気持ちが強かっただろう。一挿話として、当時（1715 年ころ）ダブリンの街を歩いていたスウィフトが罵倒され、汚物を投げつけられたという話が残っている。前トーリー政権支持者として有名だったから標的にされたのだろう。

エドワード・サイードのいうように、1714 年以降のホイッグ長期政権で、スウィフトは「ただアウトサイダーになるしかなかった」⁽¹⁵⁾のかもしれない。ついでに言えばサイードはブラックマー(R.P. Blackmur)の言葉を借りて「本当に精神的アナーキーであると常に（これまでも）トーリー的香り(a tory flavor)があります」といっている。伝統的な説明では説明のつかないスウィフトのアナーキーな面を指摘しているのは面白い。

沈黙を守っていたスウィフトだったが、1719 年 12 月 8 日に書かれた手紙には、「これ以上われ関せずの態度をとり続けることは困難だ」⁽¹⁶⁾と述べている。彼のイギリス政府への怒りが募ってくる。このころ、イギリス政府はさらにアイルランド抑圧政策を取ってきた。そのような状況からスウィフトは自分をアイルランド人と同化させる(identify)ことになる。もはやたまたまアイルランドに住みついているイングランド人という意識は捨てないといけなくなる。それまでスウィフトの意識には **we**(われわれ)といえ自分を含めたイングランド人で **they** (彼ら) がアイルランド人であったが、いまはじめて **we** は彼らアングロアイリッシュを含めたアイルランド人となる。スウィ

フトは彼の激しい気性もあって、現実の矛盾、悪に黙っておれなくなる。あまりにもひどいイギリス政府の弾圧からのアイルランドの解放を訴えるスウィフトが生まれる。

1720 年になり、「万人のアイルランド製品使用を提案する」を発表し、さらに 1724 年の「ドレイピア書簡」(*The Drapier's Letters*)で大活躍し、一挙にアイルランドの英雄となる（この二件の話は有名なことなので省略する）。ただ注意したいことは、このアイルランド全体を巻き込む運動、動きに加担したのはスウィフトだけではなかった。ダブリン大主教の William King はスウィフトの上司だが、彼もこの運動を積極的に支持した。つまり、それまでバラバラだったアイルランドの人々が力を合わせてイングランド政府の政策に反対した。

最後に 1720 年代後半のスウィフトの心境を表すいくつかの詩とアイルランド関係の小論を紹介しておきたい。

1726 年から翌年にかけて『ガリヴァー旅行記』出版などの相談もあり、ロンドンに滞在した。この最後の長期滞在から帰国するとき、海が荒れたため、ホリーヘッド (Holyhead) で足止めを食らった。（この時の状況は *Holyhead Journal* に詳しい。）1727 年 9 月のことで、スウィフトが 60 歳直前のことであった。「アイルランド」と題する詩の冒頭は次のようになっている。

Remove me from this land of slaves,
Where all are fools, and all are knaves;
Where every knaves and fool is bought,
Yet kindly sells himself for naught...
While English sharpers take the pay,
And then stand by to see fair play.

この奴隷の国から立ち退かせてくれ、
みな愚者で、ならずものたちの国
ならずものや愚者が一人残らず買われ
さりとてただで身売るやさしさ…
イングランドのいかさま師がペイを取り
そしてフェアプレーを高みの見物とくる
(*Ireland*, II.1-6)[下線は引用者による]

アイルランドの隷属的状況と人々の奴隷根性、イングランドの狡猾な統治政策を指摘しつつ、そのアイルランドが終の棲家となるわが身の不遇を嘆く。一方で、親友 A・ポープへの 1729 年 8 月 11 日付の手紙では、

この国では、三年続きの穀物飢饉に至るところに乞食がいるが、もっといい気候の地でも飢饉はよくあることである。われわれの災厄はもっと深いところにある。想像してくれたまえ、国の歳入の三分の二が国外で使われ、残りの三分の一で交易

することも許されず、女性たちはプライドから輸入品より優れているときですら、自国の製品を身にまとうことを嫌うような国を⁽¹⁷⁾。

先に解説した「ひどい目にあった婦人の話」の1707年と状況が一向に変わっていないが分かる。

このころ書かれた、未完成の草稿でもそれは確認できる。それは「アイルランドでは格言が規制される」(*Maxims controlled in Ireland*)というタイトルのものである。その中で、ふつう国の格言、定理とされるものがアイルランドでは否定されているとする。たとえば、物価が高いのと低金利は国の繁栄を示すというが、アイルランドではそうでない。貿易がイングランドにより抑えられているから、金余りの状態で、地価がどんどん上がり、しかもその土地を持っているのはイングランドに住んでいる不在地主(アブセンティー)である。その土地を借りている小作人は高い地代を払うため農作物の値を上げる。人口が多いのは国の富とされるが、この国ではそうでない。地代が高く、小作人がそれを払えないから土地から離れ乞食が多い。また大量の移民が出る原因である。アフリカでは奴隷として外国に売っているようだが、アイルランドもそうすれば儲かるとブラックユーモアを書いている。この展開から、ここでは紹介しないが「控えめな提案」(*A Modest Proposal*) (1729)で幼児の肉を食用にというアイデアは簡単に結びつく。

このように一方では、自分をアイルランドに追放された身、エグザイル(exile)と考え、ドレイピア書簡で英雄になったあともイングランドに職を求めている、とトマス・シェリダンの伝記があり⁽¹⁸⁾、さらに一向に変わらないアイルランドの状況、人々の貧困、あさましい根性など、スウィフトは不満、怒り、不機嫌な気分になるが、一方ではイギリス政府への怒りも激しさを増して、アイルランド人意識は増幅していったわけである。

注

- (1) 渡邊弘二『メービウスの帯——書き手スウィフト』——(山口書店)1991の付録Ⅱ「漱石のスウィフト論」(pp.351-390)に詳しい解説がある。
- (2) John Boyle, Earl of Orrery, *Remarks on the Life and Writings of Dr. Jonathan Swift, in The Lives of Jonathan Swift* ed., by Daniel Cook. London and New York: Routledge, 2011. p.128.
- (3) *Journal to Stella, in the Prose Writings of Jonathan Swift* XVI ed., by Harold Williams. Oxford: Basil Blackwell, 1974. p. 660.
- (4) イギリスからアイルランドへ移住してきた人々、あるいはその子孫を「アングロアイ

- リッシュ」という。イングランドだけでなく、スコットランドからも多数の移民が来ているから、正確な言い方とはいえないが、一般的にそう呼ぶ。
- (5) 実を言えば、この視点はここ 3、40 年前からのことに過ぎない。
 - (6) Ibid., p.7.
 - (7) アングロノルマン人は 1066 年のノルマン人のイングランド征服以後移住してきたノルマン人を指す。彼らはアイルランドにも入植してきた。
 - (8) Louis A. Landa, *Swift and the Church of Ireland*. Oxford: Oxford University Press, 1954. p. 20.
 - (9) スコットランドは 1603 年にスコットランド国王ジェームズ六世がイングランドの国王ジェームズ一世として即位して以来同君連合を形成していた。
 - (10) *The Story of the Injured Lady in Irish Tracts, Jonathan Swift*, vol.IX ed. By Herbert Davis. Oxford: Basil Blackwell, 1968.
 - (11) 初穂料は、一種の税として新たに聖職者になった者がその禄の一部を国に納めていた。
 - (12) この間、1710 年 4 月にレスター(Leicester)にいた母が亡くなる。[Ehrenpreis の言い方は母の死でスウィフトの Englishness は根拠がなくなるとされる。]
 - (13) 1673 年の審査法(the Test Act)により、イギリスで官職に就くものはイングランド教会(またはアイルランド教会)に属していなければならないことになった。
 - (14) Carole Fabricant, *Swift's Landscape*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University, 1982. p.35.
 - (15) Edward Said, “Swift’s Tory Anarchy”, *Eighteenth-Century Studies* 3 (Fall, 1969). p. 60.
 - (16) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol.II, ed., by David Wooley. Frankfurt am Main: Peter Lang, 2001. p. 310.
 - (17) *The Correspondence of Jonathan Swift*, Vol.III, ed., by David Wooley. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1999. p. 245.
 - (18) Thomas Sheridan, *The Life of the Rev. Dr. Jonathan Swift in Swiftiana* XV. New York and London: Garland Publishing. p. 262.

[本稿は 2013 年 12 月 3 日人文科学研究所談話会で話した内容に一部加筆、修正し注を付けたものである]